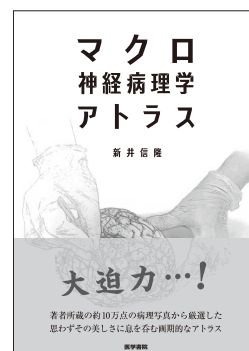


新井信隆：著

マクロ神経病理学アトラス

評者

水澤英洋（国立精神・神経医療研究センター理事長）



●エキスパートもハッとさせられる 新しい発見がいくつもある

このたび、東京都医学総合研究所神経病理解析室長の新井信隆先生の手になる本書を拝読する機会を得て、まさに、その迫力と美しさに息を呑んだ。本書の帯にある「大迫力…！」の文句のとおりであった。写真は極めて美しく、必要に応じて破線で輪郭を示したり指示線を活用したりして、かゆいところに手が届く工夫がなされている。長年、神経病理学の教育に尽力してこられた先生の面目躍如である。先生は2年間の研修の後は病理学の道に入られた神経病理学のプロフェッショナルであり、片や私は脳神経内科医でありながら、研究手法として神経病理学を学んだ者であるが、日本神経病理学会では親しくお付き合いをさせていただいた。

病の人を診るときに、まずよく診て（視診）、触って（触診）、あるいは叩く（打診）など、目・耳・手などを動員して病気を探り診断に導く。神経病理学もまさに同様であり、自らの眼をもって脳や脊髄をその場で観察し、取り出して観察し、割を入れて内面・断面を

開いて観察することが大切である。

本文はほぼすべて、貴重なマクロ（肉眼）写真とその理解を助けるための少数の大切片染色像で占められている。最初の40ページが正常像である。硬膜で覆われた大腦から始まり、脊髄の馬尾に至るまでが、外面、内面、背面、底面、水平断、冠状断、矢状断など、さまざまな方向から呈示されている。また、神経解剖学は学生にはあまり人気はないそうであるが、実はその名称は非常に自然でわかりやすい。すなわち、断面に多数の線状がみえるので「線条体」、あたかも歯のように見えるから「歯状回」——といった具合に、見るとおりに素直に命名されている。そのような由来が極めてよくわかるようになっている。このような観察には当然ながら脳を切り出す必要があり、その仕方がわかりやすく写真で表示されているのも本書ならではの特徴である。各論は循環障害（42～63ページ）、感染症（64～73ページ）、変性疾患（74～94ページ）、形成異常（95～114ページ）、周産期脳障害（115～121ページ）、代謝異常（122～131ページ）、脱髄疾患（132～134ペ

ージ）、プリオン病（135ページ）、頭部外傷（136～139ページ）と、重要な疾患は十分カバーされている。先生のご専門は発達障害にかかわる神経病理学であるが、形成異常と周産期脳障害は合わせて27ページと充実している。しかも、全体で150ページあまりと極めてコンパクトに仕上げられており、持ち運びにも困難はない。

私は40年以上にわたって脳神経内科と神経病理を専門としてきたが、嬉しいことにハッとさせられる新しい発見がいくつもあった。本書は、神経病理学や神経解剖学を学ぶ方々はもちろんのこと、それらを専門とするエキスパートの方々にも非常に役に立つ。また、脳神経内科、脳神経外科、精神科など、脳や神経にかかわりのある領域の医師・看護師のみならず、リハビリテーション科、内科、小児科など、全身を対象とする医療スタッフにもぜひ見ていただきたい1冊である。

A4 頁152 2019年7月 医学書院刊
定価：本体9,000円＋税
[ISBN978-4-260-02528-7]